

# 談話の流れと逆行代名詞化現象

真杉 理恵

## 0 はじめに

逆行代名詞化現象とその制約については、Ross-Langacker (1969) を初めとし、構成素統御による非同一指示解釈規則<sup>1</sup> を主張したReinhart (1981) などさまざまにその説明が試みられている。Reinhart の規則は、かなり有効なものであるが (1) のようなその規則では説明できない文の存在も指摘されている。

- (1) He<sub>i</sub> had already shot himself<sub>i</sub> before John<sub>j</sub> quite knew what he<sub>j</sub> was doing. (Bolinger, 1979: 298)<sup>2</sup>

この現象についてKuno (1972, 1975, 1978) は談話の観点に立ち、一文単位では逆行代名詞化とみえる文もその代名詞の指示物がすでに談話の文脈に導入されており、先行文脈に存在する「予測可能な先行詞」を受けての代名詞化であり、実際は順行代名詞化現象である、と主張する。本研究は談話という観点をういたKunoの説の重要性を強く認め、Kunoの主張点を中心に実際のテキストを検証することから始めた。調査の結果、この説はかなり有効ではあるが、反例も複数存在しこの説明だけではすべてを網羅できないことが確認された。最終的結論として、本稿ではReinhartとKunoの両者の主張を取り入れたAriel (1990, 1994) の説を最も有効な説明として例を上げながら再提案する。

次に、なぜ話者／著者は同一指示の代名詞をあえてNPに先行させるのか、といった逆行代名詞化文の誘因について、談話の流れとの関係に注目して考察した結果、逆行代名詞化現象が話題の変更を知らせる有効な手段として利用されていることを確認した。また、この談話上の話題変更という誘因に加えて、該当部の運ぶ情報量の大小が逆行代名詞化現象をおこす誘因となることについても例を上げながら主張する。

## 1 逆行代名詞化文における制約

Kuno (1972, 1975, 1978) の予測可能性制約を出発点とし、まず逆行代名詞化文におけ

る制約について実際のテキストに当り考察したい。Kunoは一文単位でみて、逆行代名詞化のように見える例も談話の中でみると、その代名詞と同一指示の名詞が必ず先行文脈にありその前出の名詞が先行詞として機能しており、その意味ではすべてが順行代名詞化である、と主張する。またKunoは逆行代名詞化文は、実は先行文脈に先行詞が既出であると主張するひとつの証拠として(2)に見られるような不定のNP (a policeman) が先行する代名詞と同一指示の読みを阻むことをあげている。

- (2) a If you see him<sub>i</sub>, stop the policeman<sub>i</sub>.  
b \*If you see him<sub>i</sub>, stop a policeman<sub>i</sub>.

(Kuno, 1978: 285)

さらにKunoは先行詞が談話の中にすでに導入されているだけでは不十分で、その代名詞の指示物となる先行詞は聞き手にとって予測可能でなければならない、とする予測可能性制約 (Predictability Requirement) を逆行代名詞化文に課した。また予測不可能な談話の冒頭での逆行代名詞化文についてKunoは、そういった文は言語外の指示対象があり聞き手に指示物が予測可能である場合か、または書き手があえて規則を破り劇的な文学的効果をねらう場合にのみ使われ、あくまでも例外的用例であるとした。

このKunoの、代名詞化は実際はすべて先行する予測可能なNPをうけての順行代名詞化である、とする予測可能性制約に対し、Carden (1982) は自己の収集したデータをもとに反論し、逆行代名詞化文の存在を主張する。Cardenは、談話に初出の不定のNPを先行詞とする、Kunoの説の反例となる(3)のような逆行代名詞化文を29例観察し、そのことを有力な反論材料のひとつとしている。

- (3) When she<sub>i</sub> was five years old, a child of my acquaintance<sub>i</sub> announced a theory that she<sub>i</sub> was inhabited by rabbits.

(Carden, 1982: 367)

Cardenはまた予測可能性制約についても12のテキストについて検証し、先行文脈からその指示物が予測不可能である逆行代名詞化文が平均51%にも上ったとする結果 (Carden, 1982: 382) を提示している。彼はこの数値の高さ、つまり使用頻度の多さは単に予測可能性制約の反証となるのみならず、Kunoのいう文学上の効果をねらった例外的用例という説明に対しても強い反証になると主張する。

こういう先行研究をうけ、雑誌・小説・学術書 (使用テキスト参照) にあたり以下の

手順で検証をおこなった。まず同一指示の代名詞が先行し後にNPがくる、いわゆる逆行代名詞化文（117例）を収集。その各文を Reinhart の規則に従い、同一指示とされる（4）のような文（タイプ1）と、非同指示とされる（5）のような文（タイプ2<sup>3</sup>）に分類した。

(4) (タイプ1) If he<sub>i</sub> is around, John<sub>i</sub> will do it.

(5) (タイプ2) \*He<sub>i</sub> will do it if John<sub>i</sub> is around.

(Kuno, 1987: 31)

次に各々のタイプについて、先行詞の定・不定と先行文脈から予測可能かどうか<sup>4</sup>について調べた。結果は、数値的にはCardenの提示した51%とは大きな差があるものの、大筋でCardenの説を支持するものであった。

(6) 先行詞の種類

	タイプ1	タイプ2
定	80%	100%
定（談話に初出）	18%	0%
不定	2%	0%

(7) 予測可能性テスト

	タイプ1	タイプ2
予測可能	84%	100%
予測不可能	16%	0%

(表6) は、先行詞のうちタイプ1の文において2%が不定のNP、18%が定ではあるが、談話に初出の人名・地名を表わすNPであったことを示している。予測可能性テストでは、(表7) に示されている通りタイプ1の文で16%が予測不可能であった。なお、この予測可能性については、言語外の写真といった要素がある場合は予測可能であると考えて数えている。先行詞の種類で定（談話に初出）と不定の合計20%（表6）と予測不可能の16%（表7）という数値の差はこのためである。

Kunoの説の反証となる先行詞が定ではあるが談話に初出の文（指示物が先行文脈から予測不可能な文）の具体例は以下の通りである。なおこの2文はいずれも談話の冒頭文である。またタイトル、写真からも指示物は分からない。

(8) Though he<sub>i</sub> tried not to think of it, at twenty-nine Tommy Castelli's life was a screaming bore.

(B. Malamud, *The Prison*)

- (9) **When he<sub>i</sub> was 12 years old, Hugh Robertson<sub>i</sub> went tramping with family and friends on the rugged west coast of New Zealand's South Island.**

(Reader's Digest, March, 1994)

こういった例はKunoでは文体上の劇的な効果をねらった例外的な文として処理される。しかし、本当にこの形は例外的でかつ劇的な効果をもたらす文体といえるのであろうか。まず第一に注目したいのは、代名詞と先行詞のNPとの間の距離である。NPを遅らすことで読者にサスペンス感を持たせるためには、(8)、(9)ともに代名詞とNPの間の距離は十分とはいえない。次に(9)の文の代名詞とNPの順番を入れ替え、NPが左方に出る順行代名詞化となる文(10)をつくり、両者を比較した。

- (10) **When Hugh Robertson<sub>i</sub> was 12 years old, he<sub>i</sub> went tramping with family and friends on the rugged west coast of New Zealand's South Island.**

(例(9), Reader's Digest, March, 1994, revised by Masugi)

(9)と(10)の文の対比において(9)の文のサスペンス感というKunoの主張する文体上の効果は希薄である。(9)の文が例外的使用でないことは下記の調査(表11)からも明らかである。

(11)	a	When	NP . . . , NP . . .	0%
	b	When	NP . . . , Pro . . .	43%
	c	When	Pro . . . , NP . . .	31%
	d	When	Pro . . . , Pro . . .	26%

(11)はWhenで始まる複文における同一指示のNPおよび代名詞の分布について100例に当り調べたものである。なお、一般的傾向を見るためこの100例は談話の冒頭文以外もふくむものである。問題となる(11b)と(11c)の43%、31%という数値は代名詞を先行させる例(9)のタイプの文が、例(10)のタイプの文と同程度によく使われる形であることを示している。

この時点までの中間的結論として以下の3点をまず確認したい。

- (12) a Kunoの主張通り一文単位では逆行代名詞化のように見える文も、談話全体の視点にたつと、先行文脈にある予測可能な先行詞をうけて

の順行代名詞化である文が多い (表7参照)

- b しかしすべて順行代名詞化しかないとするのは間違いで、まったく先行文脈のない文や、あっても代名詞の先行詞となるNPが予測不可能であり、同一文中の後ろのNPを先行詞とする (真の意味での) 逆行代名詞化文は存在する
- c 逆行代名詞文は例外的用法として処理されるものではなく、必然的に存在する文である

全体としてこの結論はCardenの説を支持するものであるが、Cardenの説は、Reinhartの解釈規則では非同指示とされる本稿のタイプ2の文の考察に関しては説明、観察ともに十分とはいえず、その点においてさらに発展、修正の必要を認めるものである。

二つのタイプの逆行代名詞化文の存在を指摘し、Cardenの説をさらに進め修正するものとして、本稿では Ariel (1990, 1994) を支持、再提案したい。Arielの説は Reinhart、Kunoの両者の主張を取り入れたいわば折衷案といえるもので、(13)の例をあげ、先行詞がそこで談話に新しく導入される場合に限っては、文の左方にくる代名詞が (13a) のように先行詞に対し依存 (従属) 関係にあることが必要であると主張する。従って、本稿のタイプ2にあたる、左方の代名詞がNPを構成素統御する (13b) の文においては同一指示の読みは難しいはずであると指摘する。

- (13) a Let me read you a cute story someone wrote in today's paper:  
"When she<sub>i</sub> was five years old, a child of my acquaintance,  
announced a theory that she was inhabited by rabbits". . .
- b ?? Sorry to interrupt you, but did you hear the good news? She<sub>i</sub>  
was told that under no circumstance would Mary<sub>i</sub> have to  
compromise herself.

(Ariel, 1990: 159)

ArielはまたCardenが予測不可能な逆行代名詞化の例として挙げた文がすべて、(13a)のタイプの文であり (13b)のタイプの文が一例もないことに注目し、後者では順行代名詞化しかないのではないかとした。Arielのこの結論は本稿の (表6) (表7)のタイプ2の項の数値結果とも一致し、また資料となった各文の観察からも最も正しく逆行代名詞化現象を説明しているものであることが確認された。

本稿の逆行代名詞化現象の制約に関する最終結論として、Arielの主張を受け、次の2点を再提案したい。

- (14) a 左方の代名詞がNPを構成素統御しない文においては（真の意味の）逆行代名詞化が起こりうる
- b 左方の代名詞がNPを構成素統御する場合はKunoの主張する通り先行文脈中にある予測可能な先行詞をうけての順行代名詞化しか許さない

次に制約ではなく、逆行代名詞化文を用いる積極的要因について考察していきたい。

## 2 逆行代名詞化文使用の誘因（1）

逆行代名詞化文は偶然の結果ではなく話者が意図的に使用する文である。その立場にたち、話者の意図、つまり逆行代名詞化現象の要因について、事例の多くみられた、副詞節（句）中に代名詞の先行する例を中心に考察する。

逆行代名詞化文の先行詞とセンテンス・トピックの関係については Reinhart によっても、一致することが多いと指摘されているが、本稿では逆行代名詞化文の先行詞とディスコース・トピックとの関係に注目する。逆行代名詞化文の先行詞であるNPは後続する談話（ディスコース）のトピックと一致する事、また逆行代名詞化文は談話の流れの中で話題（トピック）変更のための、有効な文体的手段として好んで使用され、それが逆行代名詞化文使用の一つの大きな誘因であることを主張したい。まず、逆行代名詞化文が後続する談話のトピックとなることを事例を上げながら確認し、次に話題変更の実例となぜこの形が話題変更の有効な手段となりうるのかについて論ずる。

まず第一点目の逆行代名詞化文と後続する文章のトピックとの関係について確認する。具体的には、談話のトピックとなる要素が通常現われやすいとされる、文の主語を追っていく。下記（15）（16）は各々逆行代名詞化文、順行代名詞化文の実例である。

（（15）（16）の各文の主語の下線は筆者記入）

- (15) a **When he<sub>j</sub> was a few feet away, Bronson<sub>i</sub> whispered, "I<sub>(i)</sub> want you to know I<sub>(i)</sub>'m back. The game is still on. " He<sub>j</sub> willed himself<sub>i</sub> to take another . . .**  
 (Reader's Digest, March, 1994)
- b **By the time she<sub>j</sub> was three, Matilda<sub>i</sub> had taught herself<sub>i</sub> to read by studying newspapers and magazines that lay around the**

house. At age of four she, could read fast and well and she, naturally began . . .

(R. Dahl, *Matilda*)

- (16) a When Bruce Bogtrotter, had eaten his, way through half of the entire enormous cake, he, paused for just a couple of seconds and took several deep breaths. The Trunchbull stood with hands on hips, glaring at him,. " Get on with it !" She shouted.

(R. Dahl, *Matilda*)

- b When a 12-year-old girl, learned her, mother had bought her, new T-shirt at a store teen-agers consider unfashionable, she, grew frantic. What if my friends find out ? " Adolescents fear rejection and humiliation," explains Ribordy, " and . . ."

(Reader's Digest, March, 1994)

(15a) では、第一文で逆行代名詞化したheとその先行詞のBronson についての話題が第二文のHe という主語からも分かる通りこの談話において継続される。同様に (15b) においても、先行詞 Matilda は第二文以降も she、and she と主語として登場し相変わらず Matildaが談話トピックであることを示している。(16) の順行代名詞化文と比較してみよう。(16a) では先行詞のBruce Bogtrotter は主節で he と代名詞化された形で同一文中に一回出現するのみで、第二文以降は、The Trunchbull (校長のあだな)、She と談話のトピックは校長にかわり、後に続くということがない。(16b) では第二文目から主語が my friends、Adolescents、Ribordy とめまぐるしく変わり a 12-year-old girl は後続する談話の直接のトピックとなりえていない。

ここに上げたものは各々2例のみであるが、殊に問題の逆行代名詞化文については、今回調査観察した117例、ほぼすべてにおいて、(15) の例文と同様の結果、つまり後続文の主語に複数回、同一の主語が連続して登場し、明らかに談話のトピックとなっていることが観察された。この結果は、逆行代名詞化文は後続する談話のトピックと一致するという主張を強く支持するものであった。なお、順行代名詞化文においては(16) のように後続する談話のトピックと成らない文とトピックとなる文との両者が観察され、この形と後続する談話のトピックとの関係は自由であることが分かった。

次に先行する談話も視野にいれ、第二点目の談話の流れという観点からこの現象の誘因を考えてみたい。まず具体例をあげる。これは、前出の例文(9)の逆行代名詞化文が冒頭文にあたる物語りの第二・第三パラグラフである。(主語の下線は筆者が記入、なお逆行代名詞化文の代名詞、先行詞には二重下線がうたれている。)

- (17) Like most New Zealanders, he had never seen one of these strange birds in the wild. But he knew that some 30 to 50 million years ago, these knee-high creatures had quit the skies and settled on land. The result was one of the world's oddest birds --- it can't fly, move about only at night, nests underground like a rabbit, and mates for life like a swan.

As he grew into his teens, Robertson developed a passionate interest in birds. By 1989 his bobby had blossomed into a doctorate in ornithology from Oxford University in England. When he returned home to new Zealand, he launched into five years with the Department of . . .

(Reader's Digest, March, 1994)

まず、主語がhe、 he と続き第一パラグラフからの流れで、 he (Robertson) が談話のトピックとして現われる。次に従属節中ではあるが、主語がthese knee-high creatures に変わり、The result そして it と話題の焦点はhe (Robertson) からKiwi に移行する。しかし第三パラグラフではまたRobertson が談話のトピックとして登場する。この変更の第一文に逆行代名詞化文が使われ he、 Robertson と主語になる。第二文以下は先程の結論通り his hobby、 he、 he と続きRobertson が後続する談話のトピックとして機能する。このように話題変更の冒頭に逆行代名詞化文が使われる例は、他にも多く観察された。この話題変更部への逆行代名詞化文の使用については、Biller-Lappin (1983) によっても指摘されている。

このように、逆行代名詞化文は話題変更の冒頭でよく観察されるのであるが、それではなぜ、この文が話題変更の有効な手段となりうるのであろうか。人々は話題を変更する時、なるべく自然な流れの中で変更をおこなうよう意識的、または無意識的に努力をする。そこでは、聞き手／読み手が話題に無理なく随いてくる為に、急激な変更は避けられる。その目的に答える手段が逆行代名詞化文による話題変更であると考えられる。

逆行代名詞化文による話題変更は、二つの利点を持つ。まず新しいトピックの導入が、代名詞という情報量の少ない、インパクトの少ない形でなされること。この為、聞き手／読み手は話題の変化に向けての準備をここにおいてすることができる。さらに、この話題変更は従属節に代名詞があることで、さらに効果的に行われる<sup>5</sup>。なぜなら聞き手／読み手は、従属節は主節に依存しているという言語的直感／知識をもっており、不明の要素が従属節中に現われても、次にくる主節を待つことができるからである。このことは、主節により注意が向けられることをも意味する。段階的に高まるこの流れの中で、聞き手／読み手は新しい話題にスムーズに乗っていくことができるのである。このように、逆行代名詞化文による談話の話題変更は理にかなった方法であり、故に話題変更を



その使用の大きな誘因とみることができるのである。逆行代名詞化文の誘因について、もう一つ大切な要素がある。次にそのことについて簡単にふれて本稿を終えたい。

### 3 逆行代名詞化文の誘因 (2)

ここでは述部の運ぶ情報量との関連で逆行代名詞化文の誘因を概観したい。下記(18)は Lakoff (1968) の上げている文である。

- (18) a. Mary hit him<sub>i</sub> before John<sub>i</sub> had a chance to get up.  
b. \*Mary hit him<sub>i</sub> before John<sub>i</sub> got up.  
(Lakoff, 1968: 289)

Lakoffは (18a)・(18b) の文の容認度に影響を与えるものとして、述部の長さの違いをあげている。(18a) の文の述部の運ぶ情報量の多さが、同じく情報量の多いNPを主語に要求するのである。この主語と述部の情報量のバランスが、結果として、逆行代名詞化文を生成す大きな一要因となっている。NP を主語とする文と代名詞を主語とする文の述部の情報量の違いは逆行代名詞化文においても、また順行代名詞化文においても、多く観察された。最後にほんの一部になるがその典型的な例をあげる。

- (19) a As soon as she<sub>i</sub> was on the train, Mrs Bixby<sub>i</sub> carried the box into the privacy of the Ladies Room and locked the door.  
(R. Dahl, *Kiss Kiss*)  
b As he<sub>i</sub> speaks, your boss<sub>i</sub> stands stiffly behind a chair, his hands clasped in front of him<sub>i</sub>.  
(Reader's Digest, March, 1994)
- (20) a When the surgeon<sub>i</sub> saw the deformed toddler in a South American clinic and decided to help him<sub>i</sub>, he<sub>i</sub> changed both their lives forever.  
(Reader's Digest, September, 1994)  
b When people<sub>i</sub> don't know whether to believe what they<sub>i</sub>'re hearing or what they<sub>i</sub>'re seeing, they<sub>i</sub> go with body language -- it tells the truth.  
(Reader's Digest, March, 1994)

(19) は逆行代名詞化文、(20) は順行代名詞化文の例である。また、(19b) と (20b) は同一記事中に観察されたもので、作家が述部の長さ(運ぶ情報量)にあわせて、代名詞またはNPの主語の選択を決定している事が明確に示されている。

#### 4 結語

逆行代名詞化文には、先行詞(言語外の先行詞を含む)が先行文脈にない談話の冒頭等に使われる真の意味の逆行代名詞化文と、一文単位では逆行代名詞化文のように見えても、実は先行する予測可能な先行詞をうけての談話の中での順行代名詞化文の2タイプあり、前者においては、構成素統御違反の文は排除される。また逆行代名詞化文は後続する談話のトピックと一致するという特徴(制約)を持つ。談話の流れの中でこの形はスムーズに話題変更を行う手段として有効に機能し、このことが逆行代名詞化文使用のひとつの誘因となる。他に情報量の多い述部が代名詞ではなくNPを主語に要求することも、逆行代名詞化文を引き起こす誘因と考えられる。またこの二つの誘因は、別々のものではなく、互いに関係し有機的に働くものである。

\* 本稿は日本英文学会中部支部第47回金沢大会での口頭発表に加筆修正したものである。

#### 注

1 Reinhart's Formulation : If  $NP_1$  c-commands  $NP_2$ , and  $NP_2$  is not a pronoun,  $NP_1$  and  $NP_2$  cannot be coreferential.

(Kuno, 1987: 50)

2 本稿のすべての例文中の  $i$  は同一指示を、また\*は非文をあらわす。

3 このタイプの実例は一例:

He<sub>i</sub> loathed his cousin Alan who was doing so well as an engineer and who, as a child, had always been considered dull in comparison with Eric<sub>i</sub>.

(Spark, M, *Memento Mori*)

4 Carden と同じテストを行った。つまり、後出する NP を代名詞に置き換えそれでも文脈の中で指示物が分かり筋が追える場合を予測可能であるとした。

5 主節に代名詞がある場合については今回は除外して考える。今後の研究課題としたい。

## 参考文献

- Ariel, M. (1990) *Accessing Noun-Phrase Antecedents*. New York: Routledge.
- (1994) Interpreting anaphoric expressions : a cognitive versus a pragmatic approach. *Journal of Linguistics*, 30, 3-42.
- Biller-Lappin, Y. (1983) Backwards Anaphora in Discourse. MA thesis, Tel-Aviv University. Quoted in M. Ariel, (1990).
- Bolinger, D. (1979) Pronouns in Discourse. In T. Givón (ed.), *Syntax and Semantics 12*, 289-309. New York: Academic Press.
- Carden, G. (1982) Backwards Anaphora in Discourse Context. *Journal of Linguistics*, 18, 361-87.
- Firbas, J. (1992) *Functional Sentence Perspective in Written and Spoken Communication*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fox, B. A. (1987) *Discourse Structure and Anaphora*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kanzaki, T. (1994) *Nichieigo Daimeshi no Kenkyu*. Tokyo: Kenkyusha.
- Kuno, S. (1972) Pronominalization, Reflexivization, and Direct Discourse. *Linguistic Inquiry*, 3, 161-95.
- (1975) Three Perspectives in the Functional Approach to Syntax. In L. Matejka (ed.), *Sound, Sign and Meaning*, 118-90. Ann Arbor: University of Michigan, (1976).
- (1978) Generative Discourse Analysis in America. In W. Dressler (ed.), *Current Trends in Textlinguistics*, 275-94. Berlin: Walter de Gruyter.
- (1987) *Functional Syntax*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1968) Pronouns and Reference. In J. McCawley (ed.), *Syntax and Semantics 7*, 275-335. New York: Academic Press, (1976).
- Langacker, R. W. (1969) On Pronominalization and the Chain of Command. In D. Reibe & S. Schane (eds.), *Modern Studies in English*, 160-186. N.J.: Prentice-Hall.
- McCawley, J. D. (1971) Tense and Time Reference in English. In C. Fillmore & T. Langendoen (eds.), *Studies in Linguistic Semantics*, 97-113. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Reinhart, T. (1981) Definite NP Anaphora and C-Command Domains. *Linguistic Inquiry*, 12, 605-36.
- Ross, J. R. (1967) On the Cyclic Nature of English Pronominalization. In D. Reibe & S. Schane (eds.), *Modern Studies in English*, 187-200. N.J.: Prentice-Hall, (1969).

## 使用テキスト

雑誌

Reader's Digest: March 1993, September 1993, October 1993,

November 1993, March 1994, September 1994,  
June 1995, August 1995.

*Newsweek*: 1 August 1994, 10 October 1994, 17 October 1994.

*Time*: 9 August 1993, 28 November 1994.

#### 小説

Christie, A. (1957) *The Seven Dials Mystery*. New York: Harper.

Dahl, R. (1962) *Kiss Kiss*. London: Penguin.

----- (1988) *Matilda*. London: Puffin.

Hemingway, A. (1952) *The Old Man and the Sea*. London: Penguin.

Malamud, B. (1950) *The Prison*. In J. Moffett & K. McElheny (eds.), *Points of View*. New York: New American Library, (1956).

Mansfield, K. (1966) *At the Bay*. In *The Works of Katherine Mansfield*. (1990)  
Tokyo: Hon-No-Tomo-sha.

Saint-Exupery, A. (1943) *The Little Prince*. K. Woods (trans.), New York: HBJ.

Spark, M. (1959) *Memento Mori*. London: Penguin.

#### 言語学

Bialystok, E. (1982) On the Relationship between knowing and using linguistic forms. *Applied Linguistics*, 3, 123-39.

Brown, H. (1980) *Principles of Language Learning and Teaching*. New York: Prentice Hall Regents.